

宮島新三郎「明治文学十二講」：日本近代 文学史叙述の研究(2)

大越, 嘉七

(出版者 / Publisher)

法政大学国文学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

日本文学誌要

(巻 / Volume)

6

(開始ページ / Start Page)

42

(終了ページ / End Page)

47

(発行年 / Year)

1960-12-10

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00019016>

とどいた整理がなされているが、しかしそれは個々の現象を系統的に把握、評価した立体的叙述とはいいがたく、羅列的記述に止っている。しかしこの記述においてとりわけ操山、嶺雲らの活動の一端をここにはじめて紹介した点は積極的な評価を与えたい。この後、梅溪は本書をふまえて『日本現代文学十二講』（大正一三年新潮社刊）を刊行し、当時における文学史研究の水準をこえる大幅な達成を示したのである。

宮島新三郎

『明治文学十二講』

大越 嘉 七

大正十四年五月、新詩壇社から刊行された宮島新三郎の『明治文学十二講』は、その序言によれば、初め『国民新聞』の学芸部長、島田青峯の依頼を受けて、国民婦人会の席上で六七回にわたって講演したものを、その後、加藤武雄の好意によって、大正十一年三月から約一年にわたって『文章倶楽部』に連載したものに、改めて多少の筆を加えたものである。

著者は、その同じ序言の中で、「私は前々から文化史的の立場から見た明治文芸思潮史といふやうなものを書いて見たいと思つてゐ

た」この『明治文学十二講』は、いわばそれを小説中心に試みた「『明治文芸思潮史』の序論」のやうなものだ。「しかし、著者に多少の自負を許して貰へるなら、所謂、在来の単なる記述的文学史を書こうとしたのではなく、文学を論じつつ自づからにして文化の推移が分り、時代の変遷が分るやうにと思つて取扱つた点である。私は、文学を通じて社会を見、社会に依つて文学を明らかにするといふ研究の方法を試みた。その点は、他の類似的文学史に見ない特色だといつてよからうと思ふ」と言っている。

岩城準太郎の『明治文学史』（註）がそうであったように、文学史は、あるいは経済史、政治史、思想史でも、その歴史的研究は、明治以後、方法その他西洋から入つて来た学問領域であり、以後、それが各々の分野で独立して発達し、専門化され、アカデミックな形で高踏的に行われていた。アウグスト・ベックのドイツ文献学に学んだ国文学者の手によって初められた日本近代文学史（当時においては明治文学史）の研究も、とかく書誌学的文献学的に、形式美学的に、あるいは心理主義的に傾いていった。それが大正期になると所謂デモクラシーの線に沿つて学問が大衆に解放され、民衆化され歴史の分野では「文化史」といふやうな機運が起り、さまざまな文化現象を、政治、経済も含めた文学、芸術、思想、社会等を総合的に捉えようとする傾向となつて、文化史も、あるいは芸術史、経済史、政治史、思想史等も、相互の関連の中で見直そうといふ機運が生れてきた。そういう機運の中から、この「文学を通じて社会を見社会に依つて文学を明らかにし」「文学を論じつつ自づから文化の推移が分り、時代の變遷が分るやうに」といふ、所謂「文化史的」『明治文学十二講』は出てきたのであった。

昭和期に入ると、唯物史観が出てきて、所謂上部構造、下部構造の關係から文学、芸術、思想等を、下部構造から解釈していくといふことがなされ、社会史的觀點に立った文学史（例えば津田左右吉の研究）、あるいは極端な唯物史観の立場に立った文学史、例えば篠田太郎の『史的唯物論より觀たる近代日本文学史』（昭和七年、春陽堂——別にあつかうことになっている）等が現われて、従来の定説的文学史とは異なった新しい文学史を建設しようという試みがなされてくるのであるが、そういう機運の萌芽に先鞭をつけた文学史的試みとして、従来の文学史を何らかの新しい觀點から考察しようとした文学史として、従来のアカデミックな文学の史的研究を民衆化しようとした試みとして、この『明治文学十二講』は、画期的意義とまではいかないにしても、またそれが具体的にどういふ結果に終っているかは一応別問題として、日本近代文学史叙述における歴史的意義をそこに一応認めてよいのではないかと思う。

『明治文学十二講』は「時代を尊ずるのは、文学の文化史的意義を特に重大視するからである。」という立場から時代区分のことから書き出されている。がそれは、かつて「歴史家がするやうに、又文学史家が試みるやうに、便宜上、明治文学の時代を、大体四期に區別」というものである。参考のため、それを表示すれば次のようになる。

明治文学を左のように四期に分けて叙述するやり方は、岩城準太郎の『明治文学史』以来、一般化していたやり方で、従来の慣習をそのまま踏襲したものであるが、それは、あるいは「文化史的」にみても一応妥当なものであった。

明治文学の時期

第一期	旧文学の余光	時代	（自明治初年 至同十七八年）
第二期	明治文学の建設期		（自明治十七八年 至同二十七八年）
第三期	理想主義	対立期	（自明治三七八年 至同三十七八年）
第四期	自然主義時代		（自明治三七八年 至同四十五年）

『明治文学十二講』は、この時代区分に従い、その各々について、社会相、時代思潮との相互關係の中で有機的に考察していくという叙述の形態を取っている。

「明治の第一期の文学は、時代を背景として生れたといふよりは寧ろ、時代に支配され、蹂躪された文学といった方が一層適切である位、時代の隷属的産物である。それだけに又時代粧を現はしたものと見ることは出来る。従って文学的立場から見れば、さまで大きな価値はないが、時代の文化史的意味から見ると、尠からず参考となる。

それ故に、明治の第一期文学は、何時、如何なる文学に於てもさうであるが、特にこの第一期文学は、時代ときりはなしては寸毫の価値もない。時代の姿を明瞭に知悉すればする程、この期の文学は明瞭な意義を帯びて来るし、その逆も亦真理たるを失はない」

これは第一期の文学に対する著者の結論めいたものであるが、明治文学の第一期を、その時代的必然の中で捉え、評価しようとする態度、これは最初に意図した「文化史的」な文学史叙述の態度の現われとして、またこの期の文学は、明治の新社会の生成から一応の

安定に達するまでの、世相の変化の最も激烈な時代の中にあつたので、その新しい時代思潮も文学へまでは及ばないで、文学は主として新社会に対する傍観者、乃至は落伍者の手にあつて、時代の批判的証言としては興味があつても、新しい時代精神と積極的なつながりはなかつた態勢を思えば、この考察は一応妥当なものであつたと言へる。

また西洋との「時代の比較」を試みて「ロシアは明治五年に『ア
ンナ・カレニナ』同八年に『処女地』を持つた。フランスは明治十
年に、『居酒屋』の傑作を持ち、ノルウェーは明治十一年に『人形
の家』を持つた。さういふ時代にあつて、吾々は僅かに『西洋膝栗
毛』や『胡瓜遣』や『安愚楽鍋』の作しか談ずることが出来ない。
けれども僅か四十有余年の後に於て、明治の最後の幕が下りる時分
の文学、それを思へば、何となく胸の大きく拡がるやうな気がす
る。その余りにも急激な進歩と発展に対して、驚き怪しまずにはあ
られない」と言っている。これは明治文化の、あるいは日本の近代
文学の根本的性格——他の国に見ないあらゆる面における急激な変
遷——を理解する上に極めて重要な指摘でなければならぬ。

しかしながら、このことが具体的な考察においてはどうかであらう
か。例えば先ず翻譯小説、政治小説について見てみると、それを民
権運動との関連において捉え、かなりたち入った形で、そこに進歩
的、啓蒙的性格を指摘し、更に次のような考察を行っている。

「翻譯小説や政治小説は、文学者の産物でなくて、政論家の余技に
なつたものといふことが出来る。然し、これは表面の觀察であつて
真相を穿つた解釈ではない。」政治に対する止み難い野心と「その
憂憤憂悶を翻譯の筆に、政治小説の筆に托したのが、彼等なのであ

る。だから彼等には最初から文学的才能はあつたのである。その文
学的才能に依つて求めて得られない憂悶憂憤の心境を披瀝したので
ある。従つて翻譯小説、政治小説の執筆は彼等に取つて余技ではな
く、生命を賭した事業であつた。」

また「比較的手近な政治という實際生活の中に、無限に求めてや
まない人間の理想を具現しようとする一つの可憐な美しいロマンテ
イシズムの現はれではあるまいか。」とも言っている。

これは従来、「過渡期的産物」というような説明しかなされなかつたこと
から、一歩進み出て、文芸を対人生の熱情を托すに足るもの、従つて
人生における重大問題と真正面から取り組むべき性質のものとして考
えるようになった作者達の心情の反映を敏くも読みとり、文芸界の主
潮が、漸く江戸末期の文芸遊戯観から、人生主義的芸術観にと移行し
つつあつた形を、判然と表示したものである。文学史的な重大意義を、
極めておぼろげに、極めて不透明ではあるが、覗き見ているものとして
注意に値するのであらねばならぬのである。それが極めておぼろげで
あるが故に、結局は「傾向的」「概念的」「第二義的」なものであつ
て、「文学それ自体としての価値や意義」は認めることができないとい
う従来通りの評価に墮してしまひ「文化史の見地」から「時世相の写
鏡としての存在意義」があり、「眞の文学の如何なるものであるかを明
白にする対象物としてだけ」「次の新興文芸を培う素因」があり、その
意味における存在価値においてしか評価しないという軽卒さに流され
て、折角の考察も結局明治第一期は「無文学の時代」との結論に落ち着く。

そこには明らかに、現象的把握を的確な科学的把握へまで高めて
確然たる史的位置づけにまで進み得ない弱点と、近代的文学観念把

握の限界とを潜めており、従って政治小説の持つ積極性を正しく評価できないで、文学を「文化史的」材料としか見ない安易ささえ覗かせることになっているのである。（ここには、自然主義的文学史観をうのみにしただけの著者の、その積極性と同時に、その限界が歴然とあらわれていると言える。）

この種の論文では最も痛手な極端な紙数制限が加えられているので、残念ではあるが細部の比較検討は省いて先を急げば、第二期の文学、即ち現代を支配する文学精神、即ち、近代の文学観念が坪内逍遙によって口火を切られ、人生の真実を描き出さなければならぬという、当時においては画期的な性格を持った、所謂近代写実主義の提唱以後の文学について、此書は次のように展望している。

明治初期の「残党文学」に飽き足らずして起ってきたのが坪内逍遙の「人生的傾向」であり、この叫びに合致して抬頭したのが二葉亭四迷の『浮雲』であって、尚『当世書生氣質』に残存していた「在来の芸術即遊戯といふ遺産観念」を受け継いで出てきたのが「芸術的傾向」の代表者尾崎紅葉を中心とする硯友社一派であった。そして前者の人生的傾向の延長線上に、文学界、あるいは自然主義文学が生れてくる。これを表示すれば次のようになる。

坪内逍遙　「人生的傾向」——二葉亭四迷（『浮雲』）：「文学界」
『小説神髓』　「自然主義」
「芸術的傾向」——尾崎紅葉（硯友社一派）

明治初年の戯作文学から、『新体詩』や『小説神髓』によるひよわいながらの新文学理論の誕生、文学界らの浪漫主義による、その主體的消化を経た後、自然主義と白樺派とによって確立された日本近代文学を、このように、まがりなりにも近代的文学観念によ

て貫き、強引な形を伴いながらも一応体系づけたのは、自然主義イデオログの一人であった相馬御風の『明治文学講話』（大正三年新潮社、——自然主義的文学史観の検討と共に前掲論文参照）によっても知られるように、自然主義文学者達の大きな功績であった。

が勿論、『明治文学講話』にもみられるように、すでに検討されているように、そこには積極面と同時に、幾多の欠陥と限界とをはらんでいた。しかし、この文学史的構図は、その後長く日本近代文学史叙述の基礎となったものである。「文化史的」文学史『明治文学十二講』は、この業績を、功も罪もそのまま踏襲したものに外ならない。『浮雲』を「自然派の小説」として、自然主義文学の先駆だといひ、『春』を藤村の代表作とするところ、紅葉、露伴、漱石、鷗外等が「現実的」でないという名目のもとに、不当な評価が加えられるなど、自然主義的文学史観の積極面は十分供えながらもこれはまた悪しき自然主義的文学史観の現われでなければならぬ。この自然主義的文学史観の安易な踏襲が、「一つ一つの作品の鑑賞批判といふ点にも相当の努力を払った。」という著者の言葉にもかかわらず、結局、作品分析の不十分さを結果することになっている。何らかの新しい立場に立つ、新しい方法によるということは、旧い材料を新しく見直すことを意味すると同時に、従来高く評価されなかったものや、無視されていたものの価値を、新しく提示するのでなければならぬ。ところがこの『明治文学十二講』は、所謂自然主義的文学史観の立場に立った従来の文学史から、その史的構図においては勿論のこと、個々の作家や作品の評価に至っても、結局一步の脱線すらしないものになっているのである。

例えば『浮雲』の評価はこうである。それはあくまで「人生研究

の根本から出発」しているため、「深刻」であって「重苦しい印象」を与える「思索的傾向」の作品であり、これこそ「真に人生と密接な交渉を持った文学」で、自然派の脈を日本の文壇に始めて引き入れた作品と言わなければならない。「書生氣質」は「旧」であるが浮雲は「新」である、と。しかしながら、肝心の「深刻」さや「重苦しい印象」が、時代的背景とどう結びつくのかということになると、必ずしも有機的な考察がなされないで、表層的時代機運やロシア文学との関連だけに終って、自我確立と同時に、その道への梗塞を余儀無くさせられた日本近代文学の特殊性には触れられることなく、従って時代機運の根本的、批判的把握も、作品の持つ歴史的、時代的必然の把握もなされないことになっている。だからそこに当然強引さや性急さもつきまとわざるを得ない。また「深刻」とか「重苦しい印象」とか、「旧い」とか「新しい」とかいうような説明は、従来の作品評価の悪弊の典型であった。これは個々の作品の吟味や分析から出発するのではなく、当時一般化していた、あるいは常識化、公式化さえしていた所謂自然主義的文学史観とその作品評価にのっかって、つまり当時としては漸新な感じを与えた「文化史的立場」という額縁の、自然主義的文学史観という色眼鏡で覗いてみたものになっている。従って作品評価において以前の評価の踏襲でないものが見い出されないのが、著者の『明治文学十二講』は「一つのクリエーションである」という言葉にもかかわらず、その特徴とならざるを得なかったのである。従ってまた、「文化史的立場」というものも如何に薄手のものであったかが知れるのである。初めに引用した、「時代の比較」による明治文化、あるいは文学の性格理解も、これまたそれだけのものであったことになろう。

六頁にもわたる目次が示すように、複雑を極めた明治小説の全てが各項目別に網羅されている。その全てに対して、新しい立場に立って評価を与えようとすれば、しかもそれが見てきたように薄手なものであるとすれば、その結果は当然ながら、自らの依った自然主義的文学史観なるものの悪弊が、その作品評価に、特に色濃く出ることにならざるを得ない。「文化史的立場」とは自然主義的文学史観と全く重なるものに外ならなかった。

「如何なる場合に於ても、近代芸術の強みは、現実的という一点に存する。」浪漫主義も、この最重要な強みを失い、「现实生活、實際社会の岸辺から足をふみはづした」、そしてあるものは「遊戯的傾向」へと走った。

紅葉も露伴も「现实生活を觀察することなく勝手気侷な夢を見ていた。」紅葉は「複雑多岐な人情」を描こうとはしたが、「現実的人情」には触れなかった。一方露伴は「一個の理想」を描くことは描いたが、「现实生活」との交渉に対しては考察を払わなかった。

「夏目漱石氏の文学観は、一言でいえば、毫も新しいところがなく極めて古い在来の文学観から一步も出ていない。文芸は縹渺として風塵を忘れしめ、武陵桃源の夢を結ばせるもの、而かもその夢は道徳を破壊し傷ける種類のものではならぬこと、出来れば、壯嚴の美をも加えて懦夫をして立たしめる態のものであらねばならぬといふのである。そこには更に近代人の悩みを通して芸術に対する要求も憧憬もない。所詮氏の解釈に従へば、文学は一種の享樂である。道徳に傷つけない程の道楽である。出来ればヘロイックな心持を読む者に起させるものであって欲しいといふことに帰着する。」

『行人』は「三角関係の机上遊戯」の大的失敗作であり、『明暗』は利己心解剖の「遊戯」であり「つくりもの」である。

漱石は「芸術家としての第一義的な根本性質を欠いていた。」「その第一義性とは何か。人生に対する深い愛である。人生に対する真面目な要求である。人生に対する遠大な理想である。人生に対する価値改造の意欲である。夏目氏は、これ等の愛なり、要求なり、理想なり、意欲なりを殆んど持ち合せていなかった。」従って「夏目漱石氏は近代人ではない。」

これはまさに、著者の言い方を借りれば、ここに至って漱石評価は地に落ちたと言わなければなるまい。自然主義の傍系であったが故に、最大のスペースを以って最大の非難を浴びせられている。この評価はまさに、日本近代文学史叙述における、歴史的事実として銘記に値するものであろう。

この漱石評価を含む『明治文学十二講』は、七年後の昭和七年四月に、題名通り十二講に項目が整理された——第二講と第三講とが（その一）（その二）の形になって第二講に合併され、『第八講』『文学界』の運動の講が「第七講日清戦争と思想界の推移」の後に吸収され、附録一、附録二がそれぞれ十一講、十二講となって、「附録二夏目漱石氏の芸術」に鷗外の説明が二、三頁附加されて第十二講「漱石及鷗外の芸術」となっている。——以外は一行の書き改めもなされない、全く字句訂正だけの改訂版が出された。それが更に三年に再版、以後要望に答えて再々版を重ねられて、戦前まで多く用いられた。これまた銘記に値することではなければならない。

がしかし、つぶさに見れば、『明治文学十二講』は、それまでの

文学史研究の成果を、文学観念や史的構図や作品評価においても、あるいは文献的にも、あるいは時代区分その他叙述の方法にしても余すところなく十分利用し、粗雑で網羅的であることは免かれないうが、かなり熟した形で整理（『十二講』の目次参照）し、見てきたように浅薄なものではあったが、社会的背景の中で捉えるという、社会的背景の叙述を、文学史叙述の潤滑油程度には効果的に生かし、当時の機運に合致したやり方で、アカデミックで狭少になっていた文学史を、一般民衆にも近接感を与え、理解し易いやり方で叙述したことは、やはりはっきり評価しなければならないことだろう。文章も明快で、多くの項目に分けて叙述され、作家作品も抜け目なく紹介につとめ、著作解題の役目も果たさせ、年表や研究書録も加えて便利をはかっている点等々、此書が長く多くの人達に用いられた要因は十分供えていたといえる。

明治文学展開の複雑な諸様相を、個々の作家や作品の具体的な吟味や分析から、より精緻に跡づけて、更にその根本原因たる社会状況の発展推移からも、文学の展開を科学的把握にまで高める作業は片岡良一の『現代文学諸相の概観』（昭和四年四月、国語と国文学別にあつかうことになっている。）の登場を待たなければならなかったのである。

※高山樗牛『明治の小説』岩城準太郎『明治文学史』本誌第4号「日本近代文学史叙述の研究1」参照

附記 右の諸論文は共同討議をふまえてまとめたものである。次回には高須芳次郎『日本現代文学十二講』片岡良一『現代文学諸相の概観』篠田太郎『史的唯物論より観たる近代日本文学史』久松潜一『明治文学序説』をとりあげる予定である。

日本近代文学史研究会